

「アマルフィ 女神の報酬」☆☆☆

2009（平成21）年6月22日鑑賞＜東宝試写室＞

監督：西谷弘
 原作：真保裕一『アマルフィ』（扶桑社刊）
 黒田康作（在イタリア日本大使館外交官）／織田裕二
 矢上紗江子（旅行者、元看護師）／天海祐希
 安達香苗（在イタリア大使館研修生）／戸田恵梨香
 藤井昌樹（紗江子を支える商社マン）／佐藤浩市
 羽場良美（在イタリア日本大使館外交官）／大塚寧々
 谷本幹安（在イタリア日本大使館外交官）／伊藤淳史
 菊原清文（在イタリア特命全権大使）／小野寺昭
 川越亘（外務大臣）／平田満
 西野道生（在イタリア日本大使館参事官）／佐野史郎
 サラ・ブライトマン／サラ・ブライトマン
 佐伯章悟（フリーライター）／福山雅治
 片岡博嗣（外務省事務次官）／中井貴一（声の出演）
 矢上まどか（紗江子の娘）／大森絢音
 バルトリーニ（ローマ市警の警部）／ロッコ・パパレオ
 2009年・日本映画・125分
 配給／東宝

＜常識はずれの全編イタリアロケを決行！＞

本作の「売り」は、邦画としては常識はずれの全編イタリアロケ。プレスシートによれば、日本人スタッフ70名を含む総勢約150名の撮影スタッフが、08年12月16日から約3カ月間に及ぶイタリアでの撮影に挑んだらしい。原作者の真保裕一氏は「最初に映画ありき」で原作づくりをスタートさせ、「主演が織田裕二」だけを念頭に、製作費の心配など全くしないで、「作者の勝手な暴走」を続けたらしい。しかし、フジテレビは「フジテレビ開局50周年記念作品」を作るべく、太っ腹なところをみせ、「ついに無茶とも言えるストーリーを現実のものとしてしまった」とのことだ。

さらに本作には、『オペラ座の怪人』（86年）で大ブレイクした世界の歌姫サラ・ブライトマンが出演し、ナポリ近郊にある世界遺産カゼルタ宮殿内でイタリア大統領ら各国首脳に天使の歌声を披露する。そうなると、ロケ代やサラ・ブライトマンの出演料、そして織田裕二以下の豪華キャストの出演料など、本作の総製作費はHow Much？

＜女兒誘拐は営利目的、それともテロの序曲？＞

映画冒頭、クリスマスを目前に、亡き夫との思い出の地を見せるために訪れたローマで、矢上紗江子（天海祐希）の娘まどか（大森絢音）が誘拐されるシーンが登場する。他方、イタリアでのテロ予告を受けて、日本からイタリアのローマに派遣された外交官黒田康作（織田裕二）が、なぜか紗江子と一緒に夫婦のようにホテルの1室に案内されるシーンが登場する。さてこれはなぜ？それはある偶然でまどかの誘拐現場に遭遇した黒田が、仕方なく通訳兼紗江子の仮の夫役として犯人からの連絡を待つ役割を命じられたため。

折しもローマの日本大使館は、イタリアで開催されるG8外相会議に出席する川越外務大臣（平田満）を迎えるため、菊原清文在イタリア特命全権大使（小野寺昭）、西野道生在イタリア日本大使館参事官（佐野史郎）を中心としてその準備に大わらわ。当然黒田もその一役を担わなければならないのに、向こう意気の強い紗江子の夫役をさせられるのはご免。黒田はそんな心境だったが、それでも任務は任務。黒田は、なかなかイタリア語が上達しない在イタリア大使館の研修生安達香苗（戸田恵梨香）と共に犯人からの連絡を待ったが・・・。

＜イタリアにはこんな法律が？＞

身代金目的の誘拐事件は日本でも多いが、これは重罪。日本の場合、犯人からの要求に応じてお金を準備したうえで、金銭授受の機会を狙って犯人を逮捕するというのが基本的手順だが、イタリアはそうではないらしい。つまり黒田の解説によれば、娘の命がいくら大切でも、犯人の要求に応じてお金を渡せば、お金を渡した人間まで罪に問われるらしいが、それってホント？

そんなわけで、ローマ市警のバルトリーニ警部（ロッコ・パパレオ）指揮の下、紗江子と黒田は犯人に渡す新聞紙でつくった札束をいっぱい入れたバッグを持って犯人の指令どおりあちこちを走り回らされたが、こんなコトでホントに大丈夫？そう心配していると、案の定・・・。

もっとも私がみている限り、黒田と紗江子のチームワークが悪いうえ、紗江子は身代金を入れたバッグをいとも簡単に肩にひっかけすぎ。大枚が入ったバッグなのだから、ひったくり被害に遭わないよう、もっと大切に扱わなければ・・・。

＜なぜか観光地が次々と、そして最後はアマルフィ＞

私は1988年8月20日～9月4日に都市再開発の視察を兼ねてイギリス、オランダ、ドイツ、スイス、フランスを旅行したが、イタリアは1度も行ったことがない。したがって黒田と紗江子が犯人の指令に従って走り回られるテルミニ駅、サンタンジェロ城などの観光地は全く知らないし土地勘もないが、イタリア旅行をした人はかつて亡夫と共に訪れた紗江子と同じようにそれぞれ思い出があるはずだ。そんな観光地巡り（？）の後、最後に黒田が事件の鍵がここにあると目をつけたのが、本作のタイトルとなっているアマルフィ。

アマルフィはギリシャ神話の英雄ヘラクレスが愛する妖精の死を悲しみ、その亡きがらを埋めたという、世界で最も美しい世界遺産の町。ナポリの南にあるここアマルフィ海岸はイタリア南部の地中海に面した海岸で、切り立った断崖に張り付くように密集した街並みが美しく、レモンの生産地としても有名らしい。またピサ、ジェノヴァ、ヴェネツィアとともにイタリア4大海洋共和国として繁栄していた、中世の海洋都市らしい。そんな美しいアマルフィの町を舞台に展開される、黒田たちと誘拐犯との戦いの行方は？

＜こんな骨のある外交官がいれば・・・＞

真保裕一原作の本作の1つの焦点は、黒田の外交官としてキャラクター。声だけの出演の外務省事務次官の中井貴一の命令によって、テロ予告を受けたイタリアへ赴任したのだから、彼はきっと『戦争と人間』3部作（70年、71年、73年）で石原裕次郎が演じた外交官と同じように骨のある外交官？そう思っていると案の定、川越外相の警備についてマニュアルどおりの指示をする西野参事官に対していきなり問題点を指摘したから、西野が黒田を疎ましく思ったのは当然。つまり、黒田を紗江子の通訳兼夫役にしたのは、G8における外相警備の現場に黒田を介入させないための措置？

そんな骨のある外交官ながら、黒田の人あたりはいかがなもの？黒田と紗江子との絡みをみている限り、お世辞の1つも言わない（言えない）黒田はひょっとして外交官失格？そんな黒田と紗江子のチークワークの悪さが当初の犯人捜しの障害にもなるのだが、それ以上に黒田の知謀あふれる推理力はさすが立派なもの。捜査権限を持たない外交官ながら、バルトリーニ警部の制止もきかず自分の信念に従って行動する馬力と行動力大阪府の橋下徹知事のように立派なものだ。こんな骨太の外交官がいれば、日本外交も安泰だが・・・。

＜キーマンは佐藤浩市演ずる商社マン！＞

気丈に振る舞っているものの、異国の地で娘を誘拐された紗江子が心細い気持ちになり、神経がピリピリしていたのは当然。しかし任務に忠実なだけの、硬派で堅物な外交官黒田はそんな女心を全然理解しなかったから、紗江子が頼る相手は？そんなところに白馬の騎士のように現れたのが、4年前日本の病院に入院していた時に紗江子と知り合い、好意を寄せていた商社マンの藤井昌樹（佐藤浩市）。藤井は今ロンドンにいたが、電話で紗江子の苦境を知った彼は直ちにローマに飛び、紗江子の気持ちを安らげてくれたから、紗江子は感謝感激。藤井はまたいつでも飛んでくると言ってロンドンに戻ったが、さて再度訪れてくるときは？本作のキーマンとなるのが、この藤井だ。

映画前半、新聞紙の札束がいっぱい詰まったバッグをひったくった犯人が逮捕されることによって、誘拐犯の像が浮かび上がりそうになったが、それはローマ市警の幻想。犯人はそれほどバカでもないし、単純でもない。誘拐犯たちが真に狙っていたものは一体ナニ？そしてその動機は？

スリルとサスペンスに富んだ本作について犯人捜しのヒントを一切書けないのは当然だから、以上紹介したいいくつかのポイントを参考にしながら、美しいイタリアの観光名所とアマルフィ海岸を楽しみつつ、あなた自身の目でしっかり犯人捜しをしてほしい。そしてまた、犯人たちの驚くべき犯行の動機についても、しっかり考察を。